

認知症者を介護する家族の思い

入川千歩¹⁾ 北川嘉紀¹⁾ 梅田博美¹⁾ 山口里美¹⁾

藤木悦子¹⁾ 中川康江²⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 7 病棟

2) 鳥取看護大学看護学部看護学科

Thoughts of family who take care of patients with dementia

Chiho Irikawa¹⁾, Yoshinori Kitagawa¹⁾, Hiromi Umeda¹⁾, Satomi Yamaguchi¹⁾,

Etsuko Fujiki¹⁾, Yasue Nakagawa²⁾

1) The 7th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Department of Nursing, School of Nursing, Tottori College of Nursing)

要旨

看護師の行う認知症者への退院支援とは、生活の困難をできる限り緩和し、生活の継続性を失わずに住み慣れた環境へ戻るのを援助することにある。そのため、退院支援を行っていく上で、認知症者を介護する家族の思いを知る必要があると考え、今回、家族の思いを明らかにすることを目的に研究を行った。自宅で生活していた認知症者を介護する家族を対象に、認知症者に対する思いや認知症介護に対する思いについてインタビューを実施した結果、認知症者を介護する家族の思いは、日常の介護全般に対する負担に加えて、認知症特有の精神症状や行動障害への対応に、大きな負担感とストレスを抱くことが明らかになった。鳥取臨床科学 11(2), 81-86, 2019

Abstract

Discharge support for patients with dementia by nurses aims to assist them to return to their familiar environment without losing the continuity of life through reducing difficulty in daily life as much as possible. In order to do so, we recognized the need for acknowledging the thoughts and feelings of family members who provide care for patients with dementia, and therefore, we conducted a study to elucidate the thoughts and feelings of such family members. We implemented interviews with family members who were taking care of patients with dementia at home. They were asked about their thoughts and feelings toward patients with dementia and dementia care. The results showed that the family members had strong feelings of burden and stress when responding to psychiatric symptoms and behavioral disturbances which were specific to dementia

Key words: 認知症介護, 認知症治療病棟, 退院支援, 認知症の行動・心理症状 (BPSD) ; dementia care, dementia care unit, discharge support, behavioral/psychological symptoms of dementia

はじめに

高齢になり発症する多くの認知症は、元のように治る疾患ではなく、多くが進行性であるため、家族にとっては発症前とは別人のように映り、発症後の姿は衝撃的なものとなる。A 病院 B 病棟は認知症治療病棟を開棟して 2 年が経過し、様々な患者・家族と関わってきた。その中で、退院後の行き先として自宅退院を入院時には希望していた家族が、行動心理症状（以下、BPSD と略す）が収まり自宅退院可能なレベルとなっても、退院時期が迫ると施設に入所することを希望したり、入院時から甚だ施設に入所することを希望する家族が多くいる現状がある。また、入院すると、面会の回数が徐々に少なくなるなど、入院をきっかけに、患者と家族の関係が希薄化していく傾向がある。

認知症問題は、本人がその後の人生をどう生きるかということと共に、それを支える家族がどう暮らして行くかという問題でもある。高見¹⁾は、それは家族にとっては精神的な悲しみと、暮らして行く辛さを同時に抱えることになる」と述べている。

厚生労働省が平成 14 年に発表した要介護認定者における痴呆性高齢者の将来推計²⁾に依れば、「何らかの介護・支援を必要とする痴呆がある高齢者」（痴呆性自立度 II 以上）は、2025 年までに 323 万人に達すると見込まれている。また、認知症高齢者は、認知機能障害に加え、多彩な認知症による行動・BPSD が生じるために、介護に多大な精神的・肉体的な疲労を強いることになり、介護者の日常生活に大きな影響を及ぼす³⁾。家族介護者に対する支援はますます重要になると考えられている。A 病院 B 病棟においても、今

後、退院支援を行っていく上で、認知症者を介護する家族の気持ちはどのようなものなのかを知る必要があると考えた。

I. 研究目的

自宅で生活していた認知症者を介護する家族を対象に、認知症者に対する思いや認知症介護に対する思いについてインタビューを実施し、認知症患者を介護する家族の思いを明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究対象

A 病院 B 病棟で研究の目的について説明を行い、承諾を得られた退院の可能性のある認知症を有する患者 2 名の家族とした。

2. 研究期間

20XX 年 9 月 1 日から 20XY 年 3 月 31 日まで。

3. 方法

1) 調査内容

インタビューガイド。

2) 手順

(1) 研究の説明を研究対象者に行い、同意を得た。

(2) インタビューガイドを基に、研究対象者へ認知症病棟経験年数 1 年以上かつ看護師経験年数 5 年以上、認知症病棟経験年数 1 年未満かつ看護師経験年数 5 年以上の研究メンバー 2 名以上で、半構造的面接法にてインタビューを実施した。了承を得た上で、インタビュー内容を録音した。インタビューでは、表 1 に示す項目 1 から項目 7 までを聞いた。

3) 分析方法